

2022. 4. 24. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書 10章 46～52 節
『誰の声を聞いていますか』

福音書を最初に記したマルコのイエス像は、その後の福音書記者達に深い影響を与えます。そのマルコのイエス理解とは「人々と共にいるイエス」なのです。つまり、会堂に鎮座するイエスではなく、常に人々と共に在るイエス像を描き出しました。これはマルコが生きた時代の初代教会の有り様を強く物語るものなのです。

本日の聖書の箇所も「道」(ホドス)を往かれるイエスとその途上での「出会い」が書き記されてゆきます。

この物語は 35～45 節のゼベダイの子の物語のすぐ後に配置され、2つの物語の内実を強く対比してゆきます。

さて、物語はイエス一行がエリコの町に着いた時に唐突に始まります。目が不自由で物乞いをしていたバルティマイという男が「わたしを憐れんで下さい」という切実な願いを以て登場します。

バルティマイのバルというのはアラム語で「息子」という意味です。ですからバルティマイとは本人の名前なんかではなく、ただ単に「ティマイの子」という呼称にしか過ぎません。

ユダヤ社会は「名前」を大切にしました。名前に神の意志が投影されると考えたからです。しかし、ここでは障がいを持っていたからか、職がなかったからか、町の人々から蔑まれて、本来の名前さえ忘れ去られて生きねばならない孤独な人間の姿が浮き彫りにされます。更に 48 節では多くの人が彼を叱りつけたと記されます。人々にとっては憂さ晴らしに感情をぶつけるだけの対象がバルティマイの唯一の存在理由だったのでしょ。

この物語はバルティマイがただ癒されるだけの記事ではありません。マルコはここにイエスの道を本当に理解したのはゼベダイの子らかバルティマイのどちらだったかを問うのです。

バルティマイは「憐れみ」ゆえの治癒を切に求めます。それは受け入れがたい現実を実直に受け入れ、その現実からの脱却ではなく、現実を伴ったまま

生きることへのイエスの促しを求めたのです。

ゼベダイの子らは現実を受け入れないばかりか、イエスの道に対する無理解から「妄想」を求めたのです。それ故、イエスにもう一度謙虚に現場での学びが必要であると再認識へと帰されてゆきました。

52 節でイエスはバルティマイに「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と、彼の生き様の側に寄り添われます…。

「行きなさい」とは家族のもとへという意味です。しかし、彼はイエスの道に従います。それは彼の持つ「不自由」が、彼の持てなかった「自由」を選び取らせたのでしょう。

反対にゼベダイの子らは、彼らの持つ「自由」が、彼らの持てなかった「不自由」を選び取らせたのです。

イエスとの出会いで与えられるものは等しく「自由」なのです。それは「そのままですすでにあなたは恵まれている」ということなのです。なのに、その自由をゼベダイの子らは、権力にがんじがらめにされた不自由な世界を選ぶために使ってしまったのです。

癒しの過程でバルティマイは様々な声を聞いたことでしょう。称賛や非難、妬みや侮蔑…。しかし、彼はイエスの声…福音だけを迷うことなく聞き分け、自ら選び取ったのです。